

モンゴル通信

NO.4

もうマフラーしているの？

10月のモンゴル。すっかり寒くなり、夕方の6時には外が真っ暗になります。一日の中で最も寒く感じるのは、早朝。ポケットに手を入れ足早に学校へ向かっていると、同僚の先生から声をかけられました。「あなた、もうマフラーしているの？」と笑う先生。「だって今日、マイナス4度だよ！」と答えると、「冬にはマイナス40度になるのに、今からそんなでどうするの?!」と言われてしまいました。確かに、モンゴルの人たち皆、薄着。コートや皮のジャケットの下は、半袖なんです。

9月末から、アパートや学校には“パール”という温水式の集中暖房が入りました。建物内は一日中ポカポカだけれど、それにしただって外はマイナス気温。モンゴルに来る前に、敬和生から「モンゴルの人って肉食だから、体温高いらしいよ！」と聞いたことを思い出しました。毎日、肉を欠かすことのないモンゴル人。「もっと肉を食べないとモンゴルの冬は越せないよ。」という先生たち。「私の家は冬になる前に、ベランダに牛3頭分と馬1頭分の肉を買っておいて、それで一冬越すんだよ。」という校長先生。肉食文化が体温を上げるのかは定かではありませんが、モンゴルの人が寒さに強いのは確かです。

ダウンコートに帽子と手袋といった最高の装備はもう少し後に取っておこうと思いましたが、10月13日、雪が降りました。早くも最高の装備の出番です。これでまだマイナス13度。どう考えても、もう冬だけれど、季節はまだ秋ですって。マイナス40度になったら何を着ればよいのでしょうか...



何で毎日お風呂に入るの？

ある時「何で日本人は毎日お風呂に入るの？」と聞かれ「お風呂が好きだから。」と答えると、「でも、何で毎日入るの？」と聞き返されました。そう言われると、自分の中でも疑問がわいてきます...。“なんで毎日入るんだ??”

モンゴルの人たちは、毎日お風呂（お風呂と言ってもシャワーですが。）に入りません。私もここへ来て、一日二日置きになることがありますが、その理由をはっきりしています。お湯が毎日出ないから。これは、モンゴルの人が毎日お風呂に入らない理由の一つに上げられるでしょう。

草原の遊牧文化を持つモンゴルの人たち。夏に遊牧民のゲルを訪ねた時に感じた水の貴重さを思い出しました。手を洗うことすら難しく、歯を磨くのがやっとな。食事が終わると小さい鍋に500mlほどの水を湧かし、それだけで10人分の食器やお鍋などを洗い上げる。見事なものでした。以前観た映画で、ゲルの中でたらいにお湯を入れて行水する場面があったので、身体はそうにして洗っているのだと思います。

しかし、“モンゴルの人が毎日お風呂に入らないのは、水が貴重だから”との一点では片付けられないものがあります。私が「日本では毎日お風呂に入っていた。」と話す、皆一様にぎょっとするのがある。が、“もったいない!”からでなく“なんでわざわざ?”“考えられない”といった類の驚きであるから。生活習慣の違いからくる価値観の違いでしょうか。郷に入っては郷に従え。私自身、“二日に一度しか入れない”から“二日に一度入れれば十分”という価値観に変容しつつあるのです。

馬の尻尾を持って来て?!

私が一緒に活動させてもらっている先生、アリオンバートルは、民族音楽を専門としています。学校には10台の馬頭琴があって、馬頭琴クラブがあります。私も子どもに混ぜて教えてもらっています。『スーホの白い馬』の物語に登場する楽器として、その名を耳にしたことがある人は多いと思います。

物語の中で馬頭琴は“殺された大切な白馬の身体を使って作られた楽器”と語られていますが、一般的な馬頭琴は木製。棹の先端部分が馬の頭の形をしているため、日本語や中国語で“馬頭琴”と呼ばれています。モンゴル語では、モリンホール（モリ=馬、ホール=二弦の楽器）と言います。弓の毛は、馬の尻尾。学校にある10台の馬頭琴のうち、4台の弓の毛が痛んで使えなくなっていました。私が日本から持って来たバイオリンの弓も、同様に馬の尻尾。モンゴルに来て、楽器店で張り替えてもらったので、馬頭琴の弓もそうするものだと思っていました。

しかし、アリオンバートルは子どもたちに言いました。「馬の尻尾が必要だから、家族に話して、数本持って来なさい。」と！確かに、そこら中に馬がいるし、どの家庭にも遊牧民の親戚がいるけれど...誰でも持って来れるものなのか?!と、驚きました。

『スーホの白い馬』の世界。草原、遊牧民、ゲルが今もすぐそばにあります。アリオンバートルが奏でるモリンホールの音色が馬が駆ける足音や、いななきのように聴こえるのは、草原の暮らしが身近であるからこそ成せる技なのかもしれません。（富井愛）



馬頭琴クラブの子どもたち